＜前回＞修道制１

（１）修道的宗教性の普遍性とキリスト教修道制の起源

１．修道的な宗教生活は、キリスト教にかぎったものではなく、多くの宗教が共有する生き方、生き方の伝統である。孤独な超人的な修行（独居）と共同的な修行（共住）宗教学的（比較宗教学的）研究テーマ

２．ユダヤ教的伝統の再考：死海文書・クムラン教団(1947 年)の発見

祈り、禁欲、共同生活、善悪二元論的傾向（終末論、プラトニズム）という諸特徴。

洗礼者ヨハネの宗教集団

→　初期キリスト教徒の関係、とくにエルサレム教会の使徒集団

３．フィロンの著作（『瞑想的な生活について』）より

エジプトのエッセネ派、テラペウタイ（治療者？）

４．禁欲（アスケーゼ）の積極的意義

５．宗教的生の形態としての修道

・独居と共住（孤独と交わりの相補性）

・使徒的生活（via apostolica）の理想

キリストの福音を宣べ伝えるために、キリストのように清貧を尊び、使徒たちのように共同生活を営む。

・指導者のもとでの修養の意味：瞑想における異常心理（幻覚による精神錯乱）への対処。神と悪魔の「識別」の必要。経験者への相談。

Cf.「異言」の場合：「異言を語る者は、それを解釈できるように祈りなさい」（1 コリント 14:13）

（２）キリスト教修道制の歴史的展開――古代から中世へ

・現在の研究状況：キリスト教修道制と異端（たとえば、グノーシス主義）との関連。
正統と異端とを単純に分離することはできない。

・エジプト　→　東方教会（正教）　→　西方教会（カトリック）

７．エジプト

エジプトのアントニウス(251-356)：キリスト教修道制の父

修道士の理想的模範としてのアントニウスの禁欲的生活

世俗を離れ砂漠で修養する隠修士（禁欲的行者）の散在的集団

アタナシオス(296-373)の作と言われる『聖アントニウス伝』

→　アレイオス派の異端問題の文脈、アタナシオス神学との関連。

↓

隠修士的形態から共住生活へ（パコミオス）

共同生活の規律とそれに対する服従、清貧

修道制は、パレスチナ（４世紀のエルサレムは「聖地」となり、聖地巡礼が始まる。多くの修道院が建設。西方から、ヒエロニムスやルフィニウスらが訪れる)、シリア（シメオン）へ広がる。

８．東方修道制の伝統

カッパドキアのバシレイオス（-c.379、カエサリアの主教、カッパドキアの三教父の一人）：東方キリスト教の共住修道制の基礎を築く。三つの会則。

９．西方への修道制の展開

(1)アウグスティヌス

『カトリック教会の道徳』（創文社）

『アウグスティヌス会則』の「第二会則」における労働の規定（cf.「第三会則」）

労働重視の思想：労働することを欲しない修道志願者に対して、労働の有益性を説く（『修道士の労働について』）。

(2)アイルランド、学者の島

５世紀におけるパトリック（アイルランドの守護聖人）のアイルランド伝道。

６世紀より、修道制の発展。厳しい修行と学問の愛好。

ペレグリナティオ（異郷滞在、異郷遍歴）：修道院長が修道院を突然譲り渡して、行き先も告げずに遠国に旅立つなどのパターン。魂の救いのために新しい故郷を求めるという贖罪的な意味を伴った禁欲的動機に基づく行為。

コルンバヌス（-615）のガリア伝道

『修道士規定』『共住生活規定』：アイルランド同様に厳格な会則。

４．キリスト教修道制２

（１）西欧中世の修道制の展開

１．ベネディクト会則とグレゴリオス１世(590-604、修道士から教皇になった始めての人物)

モンテカッシーノ修道院（525）＝ベネディクト修道会の設立。

『ベネディクト会則』(530/534、ただし原本は喪失)

修道生活の入門という意味。入門書としての優秀さ。

東方やアイルランドの修道制のように厳格な孤独な修行を要求せず、中庸の精神で生活し、労働や定住を義務づけることによって修道院の経済的自立を図り、共同体としての修道院の運営を機能的に組織化した。修道院の自律性を確保するとともに、西欧に形成されつつあった農村社会（世俗社会）に適応する。

↓

修道院の西欧的形態の確立。

２．クリュニー修道院(910-)

修道院の世俗化の進展に対する修道院改革運動（11 世紀のグレゴリウス改革との関係は議論が分かれる)。『ベネディクト会則』の遵守。

第二代修道院長オドー(926-942)：教皇レオ七世の特許状によりクリュニーは教皇直属→ 991 年には司教権を排除、修道院の強大な系列的組織化（修道会、第五代修道院長のオデロー)。

マリア崇拝（５世紀にビザンツで現れ、シリア、エジプトに普及、ローマには７世紀)、荘厳さな典礼（音楽）

「俗人の支配と介入から教会を、とくに神聖ローマ帝国の野望からローマ教皇の権威を守るための方途」、「聖職者と俗人、神とカエサル、教皇と皇帝の分離」(J・ル＝ゴフ『ヨーロッパは中世に誕生したのか？』藤原書店、146)

司教（祈る人)、戦士（戦う人)、労働者（働く人）の分離・分化。

聖職者の妻帯と聖職売買の禁止。

「西方キリスト教に浸透するにはもう少し時間がかかる。・・・十一世紀になってはじめて西方キリスト教の信仰と実践のなかで中心的な位置を占めるようになるのである。マリア信仰は、十一世紀半ばから教会改革の核心にあり、キリスト信仰に、とりわけ聖体信仰に結びついている。聖母は受肉に不可欠の要素であり、人間とキリストを結ぶ関係のなかでしだいに大きな役割を果たすようになる。彼女は、神であるその息子の前で人間を弁護してくれるほとんど唯一の人物となる。・・・聖母は奇跡を起こす人である。・・・聖母はより高い、例外的な地位にまで登りつめたといえるだろう。いうなれば彼女は、三位一体の第四の位格なのだと私は思える。」(179-180)

３．シトー会(1098-)：クリュニー派修道士の規律弛緩への批判。『ベネディクト会則』の厳格な遵守。清貧。クリュニーの中央集権的体制に比べ民主的な形態。『愛の憲章(カ

ルタ・カリターティス)』

封建領主的諸収入の放棄、労働の重視（開墾)、経済的自立（修道院経済)。

額に汗する者こそが真の修道士であり、労働は神の栄光のため。

クレルヴォーのベルナール(-1153)の説教活動、異端に対応（アンリ派の異端を調査し、正統信仰に引き戻す)

11 世紀後半から 12 世紀にかけて、異端的民衆運動が西欧の各地に発生。一般の信徒集団の間にも、使徒的生活の理念が影響し、異端運動へと発展（教会の伝統的な教義や聖書解釈からの逸脱)。俗人たちの禁欲。

「キリストの貧者」、「リヨンの貧者」、カタリ派、ヴァルドー派。

行いの良くない司祭から秘蹟を受けることを拒む､教会内部での組織的・個人的富裕化への批判。

「リヨンにピエール・ワルドという商人が現れ、在俗の身ながら、清貧、謙虚、福音にかなう生活を説いた」、「改革運動」(J・ル＝ゴフ『ヨーロッパは中世に誕生したのか？』、194)

「世俗的、民衆的な運動である鞭打ちは、十字架とのぼりを手に、粗末な身なりに裸足で、歓声と聖歌の響く中行われた巡礼のいくつかの形態であった」、「自己の鞭打ち」、「ほとんど教会の反感と衝突した」(J・ル＝ゴフ『中世の身体』藤原書店、77)、「一二六〇年」「一三四九年」「鞭打ちは西洋の修道院の苦行には含まれていなかった」(78)

身体を管理しようとする教会と身体の抵抗。

↓

アルビジョア十字軍：1209-1229 年。フランス王権の拡大。

４．13 世紀の托鉢修道会

「教皇司教団によって承認されていたが、司教による制約を受けずに活動し、異端と闘い、新約聖書に含まれるイエス=キリストの模範と言葉を忠実に踏まえつつ、キリスト教圏、特に都市に定着しつつあった新たな社会をキリスト教の正統教義の中にとどめおくことを使命としていた。」(ル＝ゴフ『中世と貨幣』253)

民衆の宗教性のうねりに対応するために（都市、イスラーム)。

・ドミニコ会：弁舌と学問の修道士（異端の論駁、異端審問)、労働から学問へ、大学。

・フランシスコ会(小さな兄弟の修道会)：民衆の新しい宗教性を求める敬虔な運動を教会的秩序の内部に取り戻す。『第一会則』(1221 年、マタイ 19.21、マタイ 10.9-10、マルコ 8.34 を三箇条とする。)、『1224 年の会則』。清貧。

・カルメル会、アウグスティヌス会

５．三箇条

「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」

「帯の中に金貨も銀貨も銅貨も入れて行ってはならない。旅には袋も二枚の下着も、履物も杖も持って行ってはならない。働く者が食べ物を受けるのは当然である。」

「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。」

６．自発的な貧困から市場社会へ

「二つの貧困､耐え忍ぶべき貧困と､自発的な貧困」(ル＝ゴフル＝ゴフ『中世と貨幣』､158)、「修道院記録簿」「二都市のフランシスコ会が行った委託や売買その他の契約についての記載したこの記録簿には、土地の購入および土地交換についてよりも、貨幣貸対についての記載が多い」、「自発的な貧困から、貧困層に新たな富をもたらす精神的、社会的手段を引きだした」、「慈善事業」(160)。

（２）修道制の諸問題

６．使徒的生活とは何か。

労働、学問、説教

キリスト教的知識の担い手

司教／修道院／大学

↓

７．地上を生きる信仰者。キリスト教徒はいかに生きるべきか。

８．妥協・退廃と改革、この反復

王・貴族などの封建勢力による保護

社会的エリートであり続けるために。宗教的な模範となるために。

↓

終末を生きる

９．宗教的生の普遍的現象・基本類型

個人と集団

集団的運動体の熱狂

個的経験の神秘的深み・敬虔さ　→　近代世界へ

民衆の宗教性の問題

（３）アッシジのフランチェスコ（1181-1226.10.3）

「この人物は、近代的でダイナミックな中世が誕生した一二世紀から一三世紀への転換期という決定的な瞬間の只中にあって、宗教・文明そして社会を揺り動かしたのだ。」（ルゴフ『アッシジの聖フランチェスコ』、v）

教会制度の周縁に立ちつつも異端に陥ることなく、新しいキリスト教社会にふさわしい使徒的活動のモデル、托鉢修道会という新たな修道会の勃興、一種の生態学的次元におけるキリスト教霊性を豊にした。

10．フランシスコ会（Ordo Fratrum Minorum）の創始者。

富裕な織物商の家に生まれ、青年時代は放逸と快楽に生きる。1202 年のペルージャとの戦争に参加し、一年間捕虜となり、その後病の中で、主の幻を体験し回心。サン・ダミアーノ教会などの修復に着手。福音書（マタイ 10.7-19）に感動し、キリストに従い清貧と愛に生きることを決意し、洗足説教者の服をまとい、説教をはじめる（1208.2）。仲間が増え、会則を整え、ローマで教皇インノケンティウス３世の承認を受ける（1209）。聖地のイスラム教徒に宣教するために、霊的十字軍を起こし、殉教者を出す。会員が増え、分裂の危機が生じたため、1221 年に総会を開き新しい会則を作り、一般信徒の会として第三会を発足させる。1224 年 9 月アツヴェルナ山で断食中、キリストの聖痕を受け、巡回説教中に目を患い視力を失う。病気のさなか、「兄弟なる太陽の歌」（Carmen solis）を作る（1225）。死後列聖される（1230）。

＜マタイ 10 章＞

7 行って、『天の国は近づいた』と宣べ伝えなさい。8 病人をいやし、死者を生き返らせ、重い皮膚病を患っている人を清くし、悪霊を追い払いなさい。ただで受けたのだから、ただで与えなさい。9 帯の中に金貨も銀貨も銅貨も入れて行ってはならない。10 旅には袋も二枚の下着も、履物も杖も持って行ってはならない。働く者が食べ物を受けるのは当然である。11 町や村に入ったら、そこで、ふさわしい人はだれかをよく調べ、旅立つときまで、その人のもとにとどまりなさい。12 その家に入ったら、『平和があるように』と挨拶しなさい。13 家の人々がそれを受けるにふさわしければ、あなたがたの願う平和は

彼らに与えられる。もし、ふさわしくなければ、その平和はあなたがたに返ってくる。14 あなたがたを迎え入れもせず、あなたがたの言葉に耳を傾けようともしない者がいたら、その家や町を出て行くとき、足の埃を払い落としなさい。15 はっきり言っておく。裁きの日には、この町よりもソドムやゴモラの地の方が軽い罰で済む。」
16 「わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに羊を送り込むようなものだ。だから、蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい。17 人々を警戒しなさい。あなたがたは地方法院に引き渡され、会堂で鞭打たれるからである。18 また、わたしのために総督や王の前に引き出されて、彼らや異邦人に証しをすることになる。19 引き渡されたときは、何をどう言おうかと心配してはならない。そのときには、言うべきことは教えられる。

11. キリストに倣うという生き方（清貧に生きる）

・十字架からの語りかける声、「フランチェスコよ、行って私の家を修理するのだ」。
　荒れ果てた教会堂（サン・ダミアーノ教会）の修理
　カトリック教会全体の、霊的な意味での再建
　　教皇権の絶頂期（インノケンティウス三世 1198-1216）＝危機

・「貧しい人々は幸いである」
　この言葉を実践すること　→　貧しい人・ハンセン病患者と共に

・謙虚で愛に生きる。怒らない・不平を言わない。
　「私は、主イエス・キリストにおいて戒め、勧める。兄弟たちは、全ての高慢、虚栄、嫉妬、貪欲、現世のことについての心配とおもんばかり、そしり、つぶやきを避けるべきである。」

・神の被造物としての自然
　→　愛の交流・連帯性における交わりの対象としての自然
　　cf. 支配の対象としての自然（＝物）

12.『兄弟なる太陽の賛歌』

・・・

たたえられよ　我が主、
あなたから造られたもの
わけても　貴き兄弟　太陽によって。
彼は昼を造り、
主は　彼により　我らを照らす。

彼は大いなる光によって
美しく照り輝き、
いと高き　あなたの
み姿を映す。

・・・

たたえられよ　我が主、
我らの母　姉妹なる大地によって。
それは　我らを　育み、
草花を　とりどりに染め
くさぐさの実を　結ばせる。

たたえられよ　我が主、

あなたへの　愛のため
ひとを赦し　病を忍び
苦しみに耐えるものによって。

・・・

たたえられよ　我が主、
我らの姉妹　肉体の死によって。
生けるものは　だれも
その手から　逃れることがない。

・・・

13．フランチェスコの信仰の遺産→時代を超えて、近代、現代へ
・物質的な豊かさの中にあって、信仰的に生きる生き方。
教会権力の絶頂期におけるキリスト教的信仰の危機。
聖書のキリストに帰れ　→　キリストのように生きる
・信仰のことを聖職者にまかせるのではなく、信徒が自分の生活を信仰的に生きる。
「新しい敬虔」（devotio moderna）へ向かう動向。
俗人世界の宗教生活への参与の度合いが高まる、ラテン語から俗語へ
伝統的な修道会か、あるいは新しい兄弟会か
・環境危機の中で、キリスト者は自然との関わりをいかにして回復するのか。

＜参考文献＞

０．Ｋ・リーゼンフーバー『中世哲学の源流』創文社。
１．堀米庸三『正統と異端――ヨーロッパ精神の底流』中公新書。
２．グルントマン『中世異端史』創文社。
３．今野國雄『修道院』近藤出版社、『修道院――祈り・禁欲・労働の源流』岩波新書。
４．朝倉文市『修道院』講談社現代新書。
５．戸田　聡『キリスト教修道制の成立』創文社。
６．トマス・ア・ケンピス　『キリストにならいて』岩波文庫。
７．エリク・ドイル　『現代に生きる『太陽の賛歌』　フランシスコの環境の神学』
サンパウロ。
８．レオナルド・ボフ　『アシジの貧者・解放の神学』エンデルレ書店。
９．ジャック・ルゴフ　『アッシジの聖フランチェスコ』岩波書店、『中世と貨幣――歴
史人類学的考察』藤原書店。
10．ジョルジョ・アガンベン『いと高き貧しさ――修道院規則と生の形式』みすず書房。
11．川下勝　『アッシジのフランチェスコ』清水書院。
『太陽の歌――アッシジのフランシスコ』聖母文庫。
12．山口正美『ヒッポの司教　聖アウグスチノの会則～今日の修道共同体の霊性を求めて
～』サンパウロ。
13．ボンヘッファー『共に生きる生活』新教出版社。
14．教皇フランシスコ『回勅ラウダート・シ――とこに暮らす家を大切に』
カトリック中央協議会。